

英語動詞の時制と相と態 (1)

— 英語の時制 —

前 川 哲 郎

〔抄 録〕

英語の動詞の場面 (Situation) は、静態 (Stative) 場面と、動態 (Dynamic) 場面とに大別される。言語学的観点から言えば、「時間」はその言語の時制体系 (Tense System) と関わっている。英語の場合、動詞の或場面 (性質, 知覚, 状態, 関係; 出来事, 行為, 過程) を、時間線上に位置づけるのに、時制 (Tense) や相 (Aspect) が用いられる。英語の時制体系では、時間を現在時領域 (Present Time-Sphere) と過去時領域 (Past Time-Sphere) の2種に分けて考える。本稿では、英語の時制を、場面と時間領域の観点から、現代英語の実例を引用して詳論した。

キーワード：静態 / 動態場面, 現在時 / 過去時領域, 現在時域, 現在時制, 過去時制

第1章 静態・動態場面と時間領域

1. Situation Types (場面の型)

英語の動詞の「場面 (Situation)」は「静態 [状態] 場面 (Stative Situation)」と「動態場面 (Dynamic Situation)」とに大別される。静態場面は出来事というよりは「状態 (state)」や「性質 (quality)」「知覚 (perception)」「関係 (relation)」等を表す場面であって、その状態が続く間、均質的 (homogeneous) であり、継続していて、無変化である。一方、動態場面は、何かが起こる (happen, occur, or take place) 場面であって、それは一瞬の出来事のことあれば、継続することもある。その場面は均質的で無変化とは限らないし、継続的とも限らない。動態場面を「時間 (time)」の外郭に填めると、動態場面に時間の広がりがある場合にはその場面は「過程 (process)」を表し、瞬時の場合には「出来事 (event)」を表す。動作主に支配されている過程は「行動 (action)」であり、動作主に支配されている出来事は「行為 (act)」である。(以上 J. Lyons, 1977; R. Declerck, 1991 a 参照)

1.1. Stative Situation（静態場面）

静態場面を表す文句（Clause）の述語動詞を「静態動詞（Static Verb）」と呼ぶ。次に静態場面を表す文句の例（従って静態動詞を含む文句の例）を挙げる。（以下全ての例文のイタリック体や波線は全て筆者。）

- (1) His voice *is* soft in quality—too soft for a man, perhaps. (T. Hardy)
- (2) The entrance lobby *was* empty. (P. Lively)
- (3) I *think* Mr Boyle *thought* all his efforts were at last rewarded. (R. McCrum)
- (4) Getting out he *stood* on the lower steps watching them. (T. Hardy)
- (5) There she *sat*, her hands folded in her lap, gazing at him impassively. (P. Lively)
- (6) The handwriting *belongs* to a male. (COBUD)

上の例文中、第1・2例の動詞は「性質（quality）」を、第3例の動詞は「知覚（perception）」を、第4・5例の動詞は「状態（state）」を表し、第6例は「関係（relation）」を表す。静態動詞は、原則として、「持続／進行相（Durative or Progressive Aspect）」を採り得ないし、命令文にも用いられない。但し静態動詞も用法によっては動態となり得る。Cf. We were *sitting* under the vine in the conservatory. (G. Swift)

1.2. Dynamic Situation（動態場面）

動態場面を表す文句の述語動詞を「動態動詞（Dynamic Verb）」と呼ぶ。動態動詞には運動性が認められる。従って、動態動詞は「持続／進行相」を採り得るし、命令文にも用いられる。次に動態場面を表す文句の例（従って動態動詞を含む文句の例）を挙げる。

- (7) It was *raining*. (8) The rain *dripped* from the palm trees. (E. Hemingway)
- (9) We have been *talking* of his art. (T. Hardy)
- (10) He was *nodding* off to sleep in an armchair. (COBUD)
- (11) Caesar *arrived* with reinforcements and *started* to build Fiesole. (M. McCarthy)
- (12) It was *getting* near the time they broke up for the summer. (G. Swift)
- (13) She *opened* the Head's letter. (P. Lively)
- (14) Little has *changed* since then. (COBUD)

第1例の文（7）の動詞は「継続的（durative）」な出来事、第1例の文（8）と第2・3例文の動詞は「反復的（iterative）」な出来事（8）と行為（9）（10）、第4・5例文の動詞

は(狭義の)「瞬時的 (momentaneous)」な行為 (11) と出来事 (12), 第6例の文 (13) の動詞は(広義の)「瞬時的」行為, 第7例文 (14) の動詞は「継続的」な過程を表している。

2. Time-Spheres and Tenses (時間領域と時制)

一般に, 時間を大きく分けて考えると, 2種類の「時間」が考えられる。「物理的 [自然の] 時間 (physical time)」と「言語学的 [言語に関する] 時間 (linguistic time)」とである。物理学的観点から言えば, 時間は一本の直線即ち「時間線 (time line)」で表すことの出来る連続体 (continuum) であって, 現在時 (the present) によって分割される2つの部分——「過去時 (the past)」と「未来時 (the future)」——とから成る。現在時は「点」であって, 広がりはなく, 時間線に沿って, 絶えず左から右へ流れている。(Cf. Declerck, 1991 a: 16) 言語学的観点から言えば, 時間はその言語の「時制体系 (Tense System)」と関係がある。英語の場合, 動詞の或(静態または動態)場面(即ち, 性質, 知覚, 状態, 関係, または出来事, 行為, 過程)を, 時間線上に位置づけるのに, 色いろの「時制 (Tense)」や「相 (Aspect)」が用いられる。英語の時制体系では, 「時間」を2種の「時間領域 (Time-Spheres)」に分けて考える。「**現在時領域 (Present Time-Sphere)**」と「**過去時領域 (Past Time-Sphere)**」とである。

現在時領域は, **発話時 (Time of Utterance)** を含む時間領域である。従って現在時領域は発話時を含んで過去時へ遡る領域の場合もあれば, 未来時へ延びる可能性もあるし, 過去時と未来時の両方へ跨っている場合もある。(Quirk *et al.* 1985: 175) 現在時領域の, 発話時より前の部分を「前現在時域 (pre-present sector)」、発話時を取り囲んでいる部分を「現在時域 (present sector)」、発話時より後の部分を「後現在時域 (post-present sector)」と呼ぶ。

ただ, 現在時制の中で「完了相 (Perfective Aspect)」や「持続/進行相」や「完了持続/進行相 (Perfective Durative/Progressive Aspect)」等「有標の相 (Marked Aspects)」と区別して, これらのどの相にも属さない「無標の相 (Unmarked Aspect)」の時制を「単純時制 (Simple Tenses)」と呼ぶことがある。その際, 無標の相の現在時制は「単純現在時制 (Simple Present Tense)」と呼ばれる。

過去時領域は, **発話時を含まず, 完全に発話時以前の時間帯の領域**である。過去時領域にも, 話者の念頭にある「過去の或時」を基点として, 更に「(過去の) 過去」へと遡る時域の場合もあれば, 基点が過去時領域の殆ど或一瞬の時域のこともあるし, 「過去からの未来」へ延びる時域のこともある。これらの時域を, それぞれ「前過去時域 (pre-past sector)」、 「過去時域 (past sector)」、 「後過去時域 (post-past sector)」と呼ぶ。

過去時領域に属する場面を示す時制を「過去時制 (Past Tense)」と呼ぶ。現在時制の場合と同様に, 完了相にも持続/進行相にも完了持続/進行相にも属さない「無標の相」の過去時制を「単純過去時制 (Simple Past Tense)」と呼ぶ。

第2章 英語の時制

3. Simple Present Tense（現在時制）

英語の時制は「現在時制」と「過去時制」とだけである。

3.1. Establishment of a Present Sector（現在時域の位置づけ）

現在時制の基本的用法は、或場面を現在時域に位置づけることである。言い換えれば、その場面を発話時に成立しているものとして表すことである。(Declerck, 1991 b: 89-90)

現在時域の幅は、客観的に規定することは出来ない。話手は、どのような期間でも、それが発話時を取り囲んでいる時間帯である限り、現在時域として捉えることが出来る。従って、現在時域に位置づけられる場面は、非常に短い場合から非常に長い場合まで様々である。次に、様々な場面の例文を引用する。

3.2. State Present（状態現在）

現在時域は、動詞句が「普遍的陳述 (universal statement)」である場合に、その時間幅が最大となる。(Declerck, 1991 b: 90) 次の第1・2例文がその例であって、文(15)の動詞は「継続的」な性質、文(16)の動詞は「反復的」な出来事を表す。第3例の文(17)は「無終始文 (Run-On Sentence)」であるが、コロんで繋がれた2文句の動詞は共に「継続的」な性質、第4例の文(18)の動詞は「継続的」な知覚を表している。第4例文(18)に添えた参照例文は、複文 (Complex Sentence) であるが、知覚を表す主文句の動詞 (*think*) が現在時制である為、その動詞が表す場面は従位文句の動詞 (*'s*) の表す場面を「束縛 (bind)」しない。

(15) Honesty *is* the best policy. (ODEP)

(16) The spring sun usually *melts* the snow by mid March. (CIDE)

(17) My sister Lisa *is* an artist: she *is* not like other people. (P. Lively)

(18) But I don't *know* how to paint. (G. Swift)

Cf. I *think* that's disgusting. (P. Lively)

3.3. Habitual Present（習慣現在）

習慣的行為が発話時を含む現在時域内で続く場合には、現在時制となる。

(19) In weather like this, he *sits* out in the orchard with this nurse in a bikini.
(G. Swift)

(20) Mother always *says* it must seem such a comedown after Lisa. (P. Lively)

(21) He always *falls* asleep after drinking red wine. (CIDE)

3.4. Present in Declaration, Sentence, Signal, Agreement or Promise (宣言, 宣告, 信号, 契約・約束の現在)

選挙戦で勝利・敗北宣言をすとか、艦船の進水式で命名宣言をする等、様々な宣言、や判決の宣告、指揮官の意志を伝える信号文とか、契約を交わす協定文等では、現在時制が用いられる。その時の現在時域の時間幅は非常に狭いと考えられる。この様な現在時制の動詞は、例文(23)(25)の様に、副詞 'hereby' に修飾されることが多い。

(22) I *declare* Alvin B. Schiff elected! (LDCE)

(23) I hereby *sentence* you for life after all the charges against you have been proven true. (COBUD)

(24) The signal is: "ENGLAND *EXPECTS* EVERY MAN WILL DO HIS DUTY."
(T. Hardy)

(25) I hereby *agree* to assign you the rights in my play. (O. Wilde)

3.5. Instantaneous Present (実況現在)

カメラ・アイ (camera-eye) 的な描写では、カメラが追い、カメラに写る様な光景が描写されていく。その様な描写では、動作主の行為は、実況放送の様に、次つぎと単純現在時制で表現される。この際、場面は発話時の移行と共に移っていくので、現在時域の時間幅は最小となる。

(26) It is now half-past three by the clock in the turret at the top of the street...

(27) At twenty minutes to four an elderly woman *places* her basket upon the shafts, slowly *mounts*, *takes* up a seat inside, and *folds* her hands and her lips.

(T. Hardy)

3.6. Historic Present Referring to the Past (過去時に言及する史的現在)

所謂「史的現在」(Historic Present) の 'historic' は 'designating any of various tenses and moods used in the narration of past events' (NSOED) の義、即ち「過去の出来事物語 [叙述] に用いられる時制や叙法を示す」の義であって、Jespersen (1914-49: IV. § 2. 3) は過去の出来事を劇的に物語るのに用いる、として「劇的現在 (Dramatic Present)」と呼んでいる。Quirk *et al.* (1985: § 4. 8) では、I couldn't believe it! Just as we arrived, up *comes* Ben and *slaps* me on the back as if we *are* life-long friends. 'Come on, old pal,' he *says*, 'Let me buy you a drink!' 等、過去時制と史的現在が共起する例文を挙げている。

この種の時制の根底には、(現在時領域から過去時領域への)「時間の視界の転換 (a shift of temporal perspective)」(Declerck, 1991 b: 89)が見られる。

- (28) 'But he was rather alarmed when he heard how they were going on at one another. (29) "Don't ye quarrel, my dears—don't ye!" *says* he, taking off his hat out of respect to 'em.' (T. Hardy)
- (30) 'So he turned to Unity. (31) "Well, will you, Unity dear, be mine?" he *says*. (32) "Take her leavings? Not I!" *says* Unity. (33) "I'd scorn it!" (34) And away *walks* Unity Sallet likewise, though she looked back when she'd gone some way, to see if he was following her.' (T. Hardy)

3.7. Present in Synopsis or Stage Direction or Newspaper Headline (物語の梗概・劇のト書き・新聞等の見出しの現在)

この場合も、現在時制の根底には、(現在時領域から過去時領域への) 時間の視界の転換が見られる。文 (41) の見出しの下の本文では、その内容が 'the director of...has expanded his museum's horizons physically and metaphorically,...' と表現されている。

- (35) The action of the play *takes* place in Brindsley's apartment in South Kensington, London. (36) This *forms* the ground floor of a large house now divided into flats. (36) Harold Gorrington *lives* opposite; Miss Furnival *lives* above. (P. Shaffer)
- (37) Finally the Colonel *rises*. Brindsley immediately *takes* up his chair. (38) With his other hand Brindsley *pulls* the rocker into the identical position. (P. Shaffer)
- (39) But at Talbothays, in a seemingly new and different world, Tess *hopes* to find another and simpler resolution to the problem. (40) There she "appeared to feel that she had really laid a new foundation for her future" (p.246). (B. G. Hornback)
- (41) The Guggenheim Museum *Goes* Global. (*The Illustrated London News*)

3.8. Present referring to the Future (未来時に言及する現在時制)

発話時から見て未来時の場面が、現在時域に位置づけられて、現在時制が用いられることがある。この種の現在時制は、言及される未来の場面を、暦や時刻表に就いての陳述の様に、確実な予定 [出来事] として表すのである。

- (42) This year Easter Day *falls* on March 30th. (COBUD)
(43) 'What time dost say he's coming?' Morel asked. (44) 'The train *gets* in at half-past six,' she replied. (D. H. Lawrence)

3.9. Present in a Finite Adverb Clause (定形副詞文句中の現在時制)

時の副詞文句 (Temporal Clause or Adverbial Clause of Time) や開放条件の副詞文句 (Adverbial Clause of Open Condition) 等では, その文句の表す場面が未来時の場合でも, 未来表現を用いないで表現される。条件文句の動詞に就いては既に触れたので, ここでは時の副詞文句の例文だけを挙げる。

- (45) Well, when he *comes* we shall see him. (T. Hardy)
(46) The masses have been ruled since time began, and till time *ends*, ruled they will have to be. (D. H. Lawrence)

この種の現在時制は, 初期近代英語には, 次の例文 (47) の様に叙想法現在 (Present Subjunctive) や例文 (48) の様に「叙想法代用の *shall* [過去時を基点とする場面では *should* (この様な過去時制の例は後期近代英語でも稀ではない)] + 原形不定詞」であった構文の名残である。

- (47) Here will I stand till Caesar *pass* along. (W. Shakespeare)
(48) Macbeth shall never vanquish'd be until / Great Birnam wood to high Dunsinane hill / *Shall come* against him. (W. Shakespeare)
Cf. It was decided that a deputation should...ask her if she would house the piano till Mr Phillotson *should send* for it. (T. Hardy)

4. Simple Past Tense (単純過去時制)

「単純過去時制」は, 動詞の表す或 (静態または動態) 場面 (即ち性質, 知覚, 状態, 関係, または出来事, 行為, 過程) を, 過去時領域内に位置づけるのに用いられる。

4.1. Establishment of a Past Sector (過去時域の位置づけ)

過去時制の基本的用法は, 或場面を過去時領域に位置づけること, 言い換えれば, その場面を話手の念頭にある「過去の或時 (a particular point of time in the past)」に成立しているものとして表すこと, である。従って, (言外も含めて)「過去の或時」を示す副詞類 (第1例文では one day, 第2例文では early one morning, 第3例文の *met* に就いては when she was twenty-three years old という時の副詞文句) に注目する必要がある。第1例の文

(50) の波線部は過去時制の「完了相」、第2例文(51)の波線部は過去時制の「持続/進行相」の例であるが、現在/過去時制の「相」に就いては次号で扱う。

(49) One day something *happened* which in a roundabout way *was* enlightening. (50) It *gave* me a better glimpse than I had had before of the real nature of imperialism. (G. Orwell)

(51) Early one morning the subinspector at a police station the other end of the town *rang* me up on the 'phone and *said* that an elephant was ravaging the bazaar. (G. Orwell)

(52) When she *was* twenty-three years old, she *met*, at Christmas party, a young man from the Erewash Valley. (D. H. Lawrence)

4.2. Past Tense Expressing a Universal Truth (普遍的眞実を表す過去時制)

過去の或場面を過去時領域に位置づけて、普遍的眞実 (universal truth) を表すことがある。例えば、次の例文(53)の引用文は、'A cat has nine lives.' (ODEP) という諺を背景にして「九度生まれ変わるといわれる猫でも心痛の為死んだのだから、心痛は身の毒だ」という意味の諺。過去時の出来事を表明して「普遍的眞実」を含意。

(53) He was always ready to enjoy himself... 'Care *killed* a cat.' (R. Boldrewood)

5. Means of Expressing Future Time (未来時表現の手段)

英語には未来時制がないということを、Frank Palmerはその著 *Grammar* 巻末の付録 (F. R. Palmer, 1971: 193-4) で、次の様に証明している。(1) *He likes/He liked, He takes/He took* の様に形態論的には英語には2時制しかない。(2) *I shall, you will, he will* の語形変化表 (paradigm) は、文法家の作り事 [でっち上げ] (invention) に過ぎない。(3) *will* は「未来時」の他に *I'll come, if you ask me.* と「意欲 (willingness)」や *She'll sit for hours.* と「習慣 (habit)」や *That'll be John.* と「蓋然性 (probability)」や *Oil will float on water.* の様に「普遍的眞実 (general truth)」を表し、*shall* は「未来時」の他に *You shall have it tomorrow.* 等と「脅し」や「約束」を表すので、*can* や *may* と同じ法助動詞 (Modal Auxiliary) である。逆に、未来時に言及する表現は、*will, shall* の他に、*I'm flying to Paris tomorrow.* の様な持続/進行相や *I'm going to ask you a question.* の様な表現や *Term starts on Monday.* と単純現在時制や *He's about to speak.* 等の表現で表せる。特に *going to* は、*go* の持続/進行相 (*I'm going to London.* 等) と違って、未来時表現の時は *I'm going to talk.* の *going to* が [gəne] と発音される (次節の引用文(59)の *I'm*

gonna 参照) ので、音声学的にも区別できる。

Quirk *et al.* (1985: 213-9) も、英語に未来時制はないけれども、未来時表現の最も重要な構文を纏めて考察しておくことは有用なことである、と述べている。

次の2節に未来時表現の例文を挙げる。

5.1. Future Time Expression (未来時表現)

これらの表現の動詞は現在時制であって、その場面は「未来時の或時点まで延びた後現在時域」に位置づけられる。

例文 (56) の述語動詞「shall/will+持続/進行不定詞 (Cf. Jespersen, 1914-49: IV. § 13. 5)」は、文 (61) の述語動詞 (持続/進行相) と同様、未来時の或時点まで延びた後現在時域に位置づけられるが、その時域の時間幅は前者 (56) の方が後者 (61) より狭い。(Jespersen, 1914-49: IV. § 13. 5. (1)) 例文 (62) は例文 (43) の一部である。

- (54) I *shall go* myself to Paris and see if anything can be done to prevent further mischief. (D. du Maurier)
- (55) She'll *be* all right tomorrow. (F. S. Fitzgerald)
- (56) 'I'll *be writing* a note to your mother...' (P. Lively)
- (57) Where *are we going* out to? (M. Drabble)
- (58) *Are you going to* marry him? (W. S. Maugham)
- (59) I'm *gonna* work in the fiel's, in the green fiel's, an' I'm *gonna* be near to folks. (J. Steinbeck)
- (60) It is always a sign that I *am about to* have a crisis of malice. (M. Drabble)
- (61) I'm *losing* my butler soon. (M. Spark)
- (62) The train *gets* in at half-past six. (D. H. Lawrence)

5.2. Future in the Past (過去からの未来)

これらの表現の動詞は過去時制であって、その場面は「過去からの未来の或時点まで延びた後過去時域」に位置づけられる。

例文 (63) は間接話法 (前川, 1994: § 29) の被伝達文句の述語動詞の例であり、第2例の文 (65) と文 (66) とは共に自由間接話法 (前川, 1994: § 30) の述語動詞の例である。

- (63) I told her I *would think* it over a few days. (M. Spark)
- (64) It had been the yearning of his heart to find something to anchor on, to cling to—for some place which he could call admirable. (65) *Should* he *find* that place in this city if he could get there? (66) *Would* it *be* a spot in which,

without fear of farmers, or hindrance, or ridicule, he could watch and wait, and set himself to some mighty undertaking like the men of old of whom he had heard? (T. Hardy)

REFERENCES

- Declerck, R. 1991 a. *Tense in English: Its Structure and Use in Discourse*. London: Routledge.
Declerck, R. 1991 b. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
Jespersen, O. 1914-49. *A Modern English Grammar on Historical Principles* in 7 Vols. Copenhagen: Munksgaard.
Lyons, J. 1977. *Semantics* in 2 Vols. Cambridge: Cambridge University Press.
Maekawa, T. 1994. *A Reference Grammar of Present-Day English*. Kyoto: Seirin (正林書院).
Palmer, Frank. 1971. *Grammar*. Harmondsworth: Penguin.
Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

ABBREVIATIONS

- CIDE = *Cambridge International Dictionary of English*
COBUD = *Collins COBUILD English Dictionary*
LDCE = *Longman Dictionary of Contemporary English*
NSOED = *The New Shorter Oxford English Dictionary*
ODEP = *The Oxford Dictionary of English Proverbs*

(まえかわ てつを 英文学科)

1998年10月14日受理